

Colobus の大臼歯について

佐伯 政友 (東北大・歯)

Colobus badius, *Colobus verus* および *Colobus polykomos* の大臼歯における過剰形成物を現在まで調査してきた *Macaca* のそれらと比較し、つぎの如き結論を得た。

1) 霊長類の上顎大臼歯の舌側歯帯の本来の形は、近心舌側咬頭の舌側面を近心隅角部から舌側溝にかけて走る。しかし、その経過で遠心、すなわち舌側溝から近心にかけて徐々にその姿を失う。*Colobus* の舌側歯帯は *Macaca fuscata fuscata* においてみられた *Semi-cingulum rest* の如く近心舌側咬頭の舌側面の 1/2 をこえる程の状態にまで達することなく、それぞれの大臼歯の近心隅角部において pit の状態にとどまるにすぎない。

2) 上顎大臼歯の舌側溝の付近に舌側歯帯に由来する舌側中間溝副結節 (median lingual accessory groove cusp) が *Macaca irus*, *Macaca fuscata fuscata* および *Macaca fuscata yakui* の各大臼歯にそれぞれ頻度差があるにしても出現する。この形成物は *Colobus badius* 第 1 大臼歯 (88 例中 1 例) に 1.14%, 第 2 大臼歯 (88 例中 5 例) 5.68%, 第 3 大臼歯 (82 例中 4 例) 4.88%, *Colobus verus* においては第 1 大臼歯 (39 例中 1 例) に 2.56% みられたにすぎず、一方第 2 大臼歯 (36 例), 第 3 大臼歯 (36 例) にこの種の形成物はみられなかった。また、*Colobus polykomos* の第 1 (80 例), 第 2 (79 例) および第 3 大臼歯 (73 例) においてもかかる形成物をみだすことができなかった。

Colobus の上顎大臼歯は、一般に舌側歯帯の発達は舌側中間溝副結節の出現状況からも弱いということができ

る。

3) 上顎第 3 大臼歯の遠心辺縁部にあらわれる遠心副咬頭 (distal accessory cusp) は *Colobus polykomos* の 74 例にみられず、ただ *Colobus badius* (82 例中 4 例) に 4.88%, *Colobus verus* (36 例中 2 例) に 5.56% の頻度で出現したにすぎない。しかし、この両者の状態は *Macaca fuscata fuscata* (19 例中 4 例) 21.1% や *Macaca fuscata yakui* (30 例中 14 例) 46.7% におよばないにしても、*Macaca irus* (181 例中 9 例) の 5.0% に近い。

4) *Colobus* の下顎第 3 大臼歯は、*Macaca* と同じく 5 咬頭からなっているので第 6 咬頭 (6th cusp) はこの歯にあらわれやすい。しかし、本来 4 咬頭性である *Macaca* の第 1・第 2 大臼歯においても、時としてこの副咬頭が出現する。今回調査した 3 種類の *Colobus* においてはこの種の副咬頭は第 3 大臼歯にのみあらわれ、そのうちもっとも高頻度にあつたのは、*Colobus verus* (38 例中 26 例) の 68.42% であり、他は *Colobus badius* (84 例中 4 例) 4.76%, *Colobus polykomos* (72 例中 4 例) 5.56%

であつた。*Colobus verus* での出現率は *Macaca irus* (59.19%), *Macaca cyclopis* (65.0%), *Macaca fuscata fuscata* (88.2%) および *Macaca fuscata yakui* (96.0%) などに近い値をしめしている。他の二者の *Colobus* はともに出現率は低く、かつ両者間では全く有意差がない。そして、この咬頭の出現に関する限り *Colobus verus* は他の両者の *Colobus* と著明な種差をしめしている。

5) 下顎大臼歯の近・遠心・舌側咬頭間に出現する第 7 咬頭 (7th cusp) は *Colobus* の場合にはほとんどみられず、ただ *Colobus badius* の第 1 大臼歯 (92 例中 1 例) に 1.09% みられたにすぎない。そしてその形状は痕跡的に近い状態であつた。

以上の所見から *Colobus verus* の下顎第 3 大臼歯における第 6 咬頭の出現を除けば、上顎大臼歯の舌側中間溝副結節、上顎第 3 大臼歯の遠心副咬頭、下顎大臼歯の第 6 咬頭および第 7 咬頭の出現は *Macaca irus*, *Macaca cyclopis*, *Macaca fuscata fuscata*, *Macaca fuscata yakui* に比してひくい。そして *Colobus verus* の下顎第 3 大臼歯の第 6 咬頭の出現傾向には、他の 2 種の *Colobus* との間に著しい種差がみられる。

頭骨に付着する頸部背筋群の形態学的研究——おもにマカク属を中心として

本間 敏彦 (順天堂大・医)

昭和 45 年度、46 年度共同利用研究で筋の起始部、付着部を観察してきたが、今回は筋の神経支配をみてみた。特に *M. rhomboideus* 頭部、*M. serratus anterior* 頭部、*M. atlantoscapularis* 等の筋はヒトにはみられないが、それに相同なる部分があるのか、あるとしたらどの部分か、を知るうえに神経支配を知る事は重要な手がかりとなる。

M. rhomboideus の頭部には C_3 からの枝が *M. atlantoscapularis posterior* に枝をだしたのち C_4 からの小枝と合わさったのちに分布していた。*M. rhomboideus* 頸胸部には $C_4 \cdot C_5 \cdot C_6$ からの枝 (肩甲背神経) が *M. serratus anterior* 頸部に枝をだしたのちに分布していた。*M. serratus anterior* 胸部には $C_6 \cdot C_7$ の枝 (長胸神経) がいつていた。

新しい染色法による霊長類染色体の比較研究

平井 百樹 (東大・理)¹⁾

染色体分染法により、ヒトとチンパンジーの染色体の

¹⁾ 現在の所属：放射線医学総合研究所